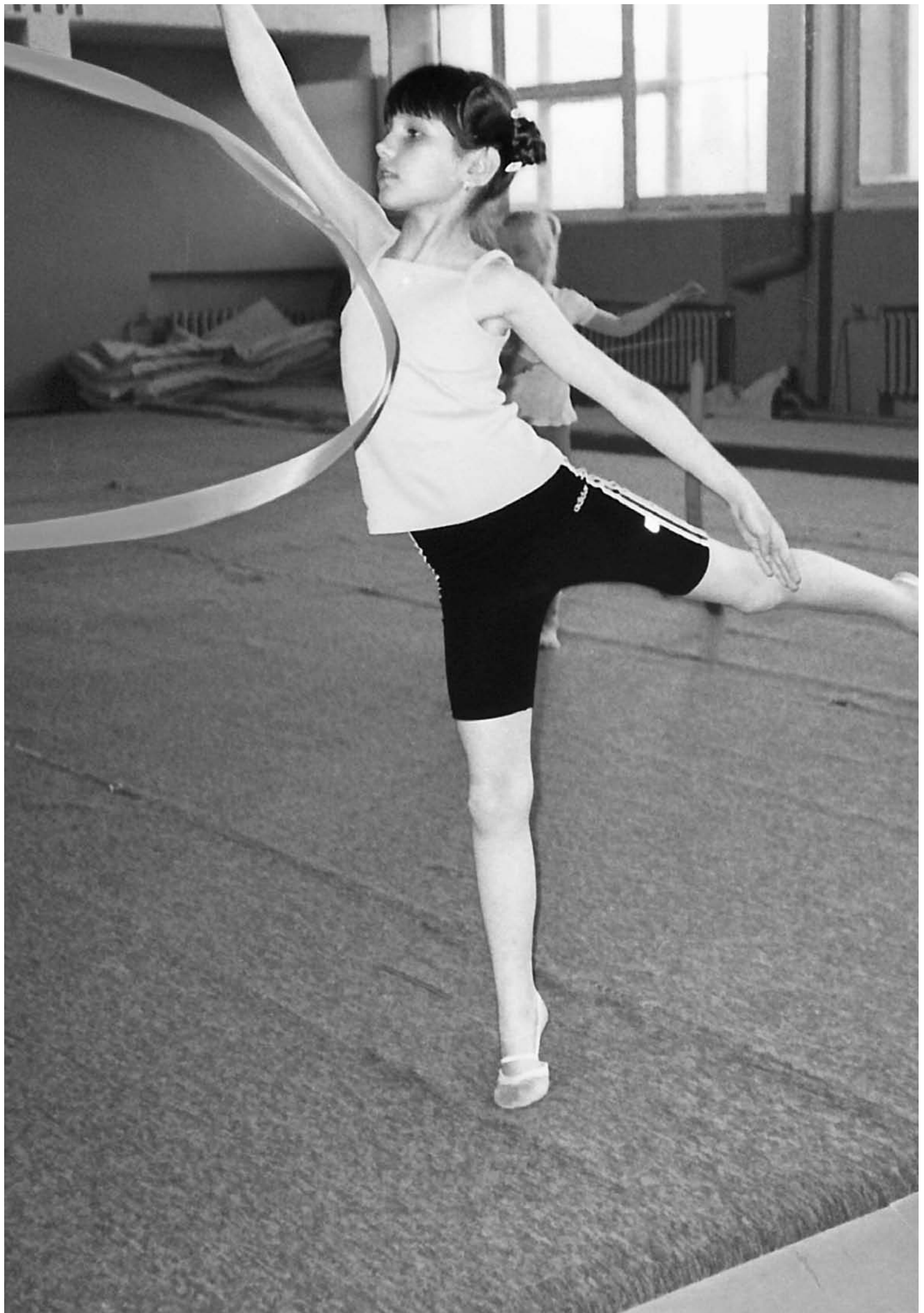


世界子供白書 2003

**THE STATE OF THE
WORLD'S CHILDREN 2003**



4

積極的な学習

学校は、子どもがもっとも重要なスキルを身につけ、世界についての知識を獲得するとともに、「社会化」され、市民としての自分たちの将来に社会がどのように期待しているのかを意識する場所のひとつである。この目的のために、盲目的服従や従順が強制されることも多かった。けれども、学校はますます、これまでとは違った社会化のための場所になりつつある。そこでは、子どもたちは批判的に考えることができるようになり、自分たちの権利と責任を学び、市民として役割を果たすための準備を積極的に整えられるようになるのである。

子どもたちが女子教育を支える

開発機関・開発援助団体は、規模の大小を問わず、女子教育への投資の費用対効果が高いこと、女子教育に緊急に投資する必要があることについて、長年にわたって一致してきた。このことは、サハラ以南のアフリカと南アジアにとりわけあてはまる。この2つの地域では、初等学校に通うべき年齢の女子5,000万人以上が就学していないのである²⁵⁾。

けれども、ウガンダで2001年8月に開始された「女子教育運動」(GEM)は、これまでに行われてきた努力とは異なっていた。アフリカの子どもと青少年自身——男の子も女の子も——が活動を主導

し、必要なときにはおとなの専門知識や助言を活用しながら、自分たちなりの熱意や楽観主義を運動に注ぎこんだのである。

子ども参加は、それ自体が教育効果を発揮するものだった。発足時からGEMに参加していたケニアとウガンダの若者たち(障害のある若者も何人か含まれている)は、創造的なファシリテーションの方法について訓練を受けていた。そのため、この若者たちは南アフリカとザンビアで同じようなワークショップを開き、ウガンダの首都カンパラで「子ども・若者議会」を開催する準備の過程で、GEMの考え方を広めることができたのである。「この会議は、最初は一言も口に出すことができなかつたすごくたくさんの女の子たちにとって、転機になりました」と、ウガンダの学生ボランティア、キャロラインは語る。「私たちは、堂々とした自己主張の力と自信でエンパワーされ、自分たちの力について前向きに考え始めたんです」²⁶⁾

女子教育という大義に向けて男子の参加も求めたというのは、GEMが唯一の例ではない。女性の識字率がわずか2%というバロチスタン州(パキスタン)では、地元のユニセフ事務所がやる気満々のボーイスカウト運動と協力し、ヨード添加塩やポリオの予防接種に関するキャンペーンをすでに行ってい

クルガン(ロシア)のダンス教室で練習する少女の姿が、16歳の写真家ミハイル・ガルマシュの注意をひきつけた。

Russian Federation/"Imagine - your photos will open my eyes"/GTZ/2002

た。けれども2000年、これを女子教育の促進にまで拡大したことで、新たな地平が切り開かれた。南アジア地域で、女の子の権利を促進するための活動に男の子たちが参加するのはこれが初めてだったのである。このプロジェクトは、ユニセフのマンガのキャラクターとして定着している女の子、ミーナの名前をとって、「兄弟たちがミーナとともに」と名づけられた。

このプロジェクトのスポークスパーソンとして国連子ども特別総会に参加したジェハンゼブ・カーン(12歳)を含むスカウトたちは、各家庭を戸別訪問して女の子の就学状況を調査し、必要に応じて、娘を就学させるよう父親の説得を試みた。このテーマが物議をかもしやすくなるのを抑えるためもあって、スカウトたちは、予防接種やトイレの設置といった他の重要な問題についても話題にした。女の子のための小学校が存在しない村では、女の子を受け入れるよう男子校を説得した。通学距離が長くて危険な場所では、女の子を学校まで送り迎えする役割を買って出た。

最初の年の成果は心強いものだった。キャンペーンの対象とした学校がそれぞれ10~15人の女の子を新規に受け入れ、総数では約2,500人に達したのである。スカウト運動がとくに力を持っているキリ・アブドゥル・ラサク村では、さらにより成果が得られた。村の学校に、80人の女の子が新規に入学したのである。「昔は、娘を教育するのは隣の家の植木に水をやるようなものだと言っておった」と、村のマリク(族長)であるアブドゥル・マラムは認める。「だが、ボーイスカウトたちに心

「私たちには自然を持つ権利がある」
トーファ・ムハンマド・アルワーディ
(9歳) タフジーズ・アルエルミ私立学校

*Children of Oman draw their rights/UNICEF Oman and Ministry of Social Affairs, Labour and Vocational Training, Oman

変わりさせられた。いまでは、娘たちには、教師にでも医者になっても何にでもなってほしいと思っておる」²⁷⁾

学校と民主主義の理想

本当の意味で子どもに優しい学校は、世界のいくつかの地域・国々で推進され、実現される例も増えてきているとはいえ、まだまだ比較的珍しい存在に留まっている。ユニセフは、最大限の子ども参加を保障するような学級運営方法のためのキャンペーンを続けてきた。これは、事実や一般的に認められた知恵を受動的に受け取るやり方ではなく、積極的学習を奨励するものである。これまでの経験からも、コミュニティの生活と環境に根ざした子ども中心の学習を保障することは、女の子の就学と学習の継続を高めるうえでも効果があることがわかっている。



たとえば、ラテンアメリカ諸国で設けられている「エスクエラ・ヌエバ」(新しい学校)と呼ばれる学校は、異なる年齢集団を基本とし、子どもの権利と民主的参加をもっとも重視する学校である。コロンビアでも最悪の暴力頻発地域2か所で25校を対象として行われた最近の研究では、協力、共存、紛争の平和的解決は教えることができるという主張を裏づける結果が出た。親、卒業生、教職員、校長の面接調査を通じ、エスクエラ・ヌエバの方法論を採用した学校のうち15校で、卒業生のコミュニティ参加やコミュニティにおける民主的行動に対して、さらには親の投票パターンに対して直接かつ有意な影響が及んでいることがわかったのである。さらに、このモデルの成功要因は地元の諸機関と市民社会によって支持されたところにあり、ボランティア運動が重要なリーダーシップを発揮していることも明らかになった。エスクエラ・ヌエバのモデルは、変革の可能性を理解している教職員、生徒自治会、親、コミュニティの創意工夫により常に発展しつづくと、この研究は結論づけている²⁸⁾。

コロンビアの農村部に端を発したエスクエラ・ヌエバのモデルが大きな成功を収め、国際的にも高い評価を得たため、このモデルはホンジュラスのような他のラテンアメリカ諸国でも採用されるようになってきた。グアテマラもこのモデルを採用し、新しい学校プログラム——「2言語・異文化統合新学校」——は、わずか12校から始まってからたった7年で、2000年までに210校、2万3,000人の生徒を対象とするに至っている。

グアテマラでとられているアプローチの基本のひとつは、先住民族であるマヤ・コミュニティの子どもの権利に対応するということである。マヤ人は、人口の半数を占めるにも関わらず、相当の差別と周縁化に苦しんでいる。授業・学習は参加型で行われ、マヤの言語と文化が全面的に活用される。遊びと学習は「学習コーナー」で創造的に組み合わせられるとともに、どの学校にも選挙による生徒会が設けられ、規律の維持、学習、文化的活動などを担当している。

生徒会は、校舎や机のペンキ塗り、塀作り、また、飢饉のときには食糧を配給することなども担当してきた。親や地域住民が関与することも欠かせないと考えられている。

新しい学校がどの程度うまくいっているかは、就学・修了率によってある程度判断することが可能である。93%という就学・修了率は全国平均よりも高い。また、女の子の就学率も高く、男の子を上回っているほどである。新しい学校は、数十年に及ぶ内戦の傷跡をいまなお深く残している同国において、平和の文化と民主主義の促進という面でも重要な貢献をしている。政府は新しい学校の重要性を認め、さらに2,000校、12万人の生徒を対象としてプログラムを拡大していく計画である²⁹⁾。

エスクエラ・ヌエバのアプローチは1998年にガイアナにも導入され、とりわけへき地の学校における生徒会の活動を通じて、すでに重要な影響を及ぼしつつある。各生徒会には、選挙で選ばれた役員がおり、規律の維持、健康・衛生、図書室や花壇の維持を担当する委員会が置かれている。日直の子どもたちは、集会の手伝い、校舎の清掃、募金活動、外部講師の招請などを担当する。ユニセフが最近行った調査で、子どもたちは、生徒会によって可能になった参加・責任の水準を好ましく受けとめていることがわかった。リーダーシップ、人前での話、組織運営に関してスキルを伸ばしていることについても同様である³⁰⁾。

スポーツを通じて学ぶ

もちろん、子どもが平和や民主主義の価値を学べる場所は学校だけではない。子どもにとって、そして開発と平和にとって同じくらい重要なのは、遊びとレクリエーション活動である。いずれも子どもの権利であると同時に、子どもたちの生活をよりよい方向へ変えていくうえで大きな可能性を秘めている。スポーツ組織化のプログラムは、国際機関、「子どものためのグローバル・ムーブメント」の構成組織、地元NGOの活動のなかで、いっそう大き

な役割を担うようになりつつある。男の子とともに女の子に対しても、また障害のない子どもとともに障害のある子どもに対しても積極的に働きかけていこうとするプログラムでも同様である（パネル4「女の子は大きく勝つ！」32ページ参照）。

子どもの身体的・精神的発達にとってスポーツが価値あるものであることは、ずっと以前から認知されてきた。チームスポーツを通じて身につけることのできる価値観や社会的スキル、たとえば紛争を解決すること、協力しあうこと、敵を理解すること、相手を尊重しながら勝ち負けを争うことなどについても数多くの文献に記されてきた。

スポーツは若者たちに、身体面にも感情面にも空間を提供してくれる。このことは、特に女の子にとって重要である。女の子は、家庭の外の、また家族のつながりを超えた社会的交際の機会が男の子よりも少ないことが多い。多くの国で、女の子や女性による利用が正当と考えられている数少ない公共空間、たとえば市場やヘルスクリニックは、主婦や母親という家庭内の役割に関係したものに限定されている。対照的に、女の子がスポーツに参加し、女性スポーツ選手が一般に認知されるようになると、彼女たちはコミュニティと新しい形でつながり、新しい場所を利用できるようになり、自分にとっての助言者を見つけ、また他の女の子・女性にとっての助言者となり、コミュニティの生活にいつそう堂々と参加し始めるのである。それに留まらず、伝統的に男性の領域だったスポーツが開放され、女の子や若い女性が参加できるようになると、女の子や女性は飾りであるという、あるいは身体面でも感情面でも男の子より弱いという固定観念が崩されていく。

いまや、スポーツはミレニアム開発目標の達成に

も貢献できる可能性があるという考え方も強まりつつある。コフィ・A・アナン国連事務総長は、「開発・健康・平和のためのスポーツ」に関する専門委員会を任命した。同委員会は、開発のための手段としてのスポーツの活用に関する勧告を作成する予定である。

「私たちは、スポーツがいかに自尊心を、リーダーとしての力を、コミュニティ精神を高め、また民族やコミュニティの分断に橋をかけうるかという実例を目にしてきました」と、事務総長はオリンピック・エイドの場で語った。「私たちは、攻撃や自壊へと向かうエネルギーをスポーツがいかにそらし、学習ややる気に向かわせることができるかということを目にしてきました」³¹⁾

スポーツは、コミュニティの人々をひとつの目的に向けてまとめあげるためにも活用されることが多い。たとえば1999年のコソボ危機の際には、若者たちがスポーツを通じ、社会の復興と平和構築に重要な貢献をした。アルバニアのクセス近郊に設置された6ヵ所の難民キャンプで「コソボ若者評議会」が結成され、15～25歳の若者2万人近くが参加したのである。ユニセフと地元のアルバニア青年クラブから支援を受けて、評議会のメンバーはスポーツ・トーナメントやコンサートを開催したり、キャンプの運営、清掃、安全確保の面で活躍したりした。また、新たに到着した家族がキャンプに溶けこむのを助け、キャンプの最貧層のために募金活動も行ったりした。幼い子どもを対象とした組織的なレクリエーションや相談活動の場で、国連機関やNGOが地雷に関する意識を高めるための情報や資料を配布するのを手伝った。評議会が団体運営や参加の経験を積んだことは、リーダーシップや問題解決に関わる新しいスキルを身につけることにつながり、評議会メ

「私たちは、堂々とした自己主張と
自信でエンパワーされ、自分たち
の力について前向きに考え始めた
んです」

キャロライン

ウガンダGEM(女子教育運動) ボランティア

子ども・若者議会、カンパラ

力強く、たくましく　そして美しく　マタレ青年スポーツ連盟（ケニア）
の少女たちが、フィールド上で競い合う。

パネル 4

女の子は大きく勝つ！

サッカーは、ほぼ全世界の人々を魅了し、数百万人の共通言語となってきた。いまや、FIFA（国際サッカー連盟）ワールドカップは史上最多の観戦者数を誇るスポーツイベントである。ユニセフと、世界のサッカーを統括する機関であるFIFAが戦略的提携関係を結んだことにより、2002年のサッカー・ワールドカップは史上初めて子どもたちに捧げられたものとなった。6月19～20日は、サッカー関連の活動を通じて子どもたちの問題に関する意識を高めるため、「セイ・イエス・フォー・チルドレン世界サッカー・デー」に指定された。すべての試合で、「セイ・イエス・フォー・チルドレン」（子どもたちのためにイエスと言おう）と書かれたユニセフのTシャツを着た子どもたちが、選手をフィールドに先導した。ワールドカップ関連のすべてのイベントで若者たちにスポットが当てられ、試合中に実施されたサッカー記念グッズのオンライン・オークションの収益はユニセフへの募金に充てられた。10億人以上の人々が試合を観戦し、子どもの権利がフロントとセンターのポジションを占めたのである。

もちろん、サッカーに魅力を感じるのはおとなたちだけではない。たとえどんなに悲惨な状況でも、世界中の子どもたちはあらゆる機会をとらえて——路地で、難民キャンプで、戦争地帯で、ボールを蹴っているのである。子どもの権利条約第31条は、「子どもが、休息しかつ余暇をもつ権利、……遊びおよびレクリエーション的活動を行う権利」を認めている。それでも、サッカーのフィールドには、さらに言えばどんなスポーツのフィールドにも、女の子の姿は男の子よりも少ない。

先駆け

マタレ（ケニア）の土のグラウンドで赤い土ぼこりをあげ

ているチームは、スーパースターの真似をする男の子たちではない。世界でもっとも人気があるスポーツに女性が参加する先駆けとなった、女の子たちである。マタレの貧民街には、いまにも壊れそうな泥壁の建物が、ゴミに覆われた川の切り立った岸に広がっている。ナイロビの北東数キロメートルの場所である。有給の仕事はなかなかなく、ナイロビの中所得家庭で家事労働ができればよし、あるいは地元の石切り場で日雇い仕事をするぐらいで、ほとんどの人々は路上で食べ物などを売ってやりくりしている。生きるために体を売ることを余儀なくされる女性も多い。このような条件下では、組織的な余暇活動はあっても極めてまれである。

1987年、マタレ唯一のサッカーチームは、糸と捨てられたプラスチック片をつぎあわせた急ごしらえのボールでプレーしていた。けれどもその年、カナダ人開発ワーカーのボブ・ムンロによるとりくみのおかげでマタレ青年スポーツ連盟（MYSA）が結成され、本当のサッカーが始まり出したのである。発足当初から、MYSAはスポーツと環境問題を結びつけてとらえていた。若者たちは、サッカーチームやサッカーリーグだけではなく、ゴミ清掃隊も作って活動した。

MYSAの成長ぶりはすばらしいもので、このようなプログラムがいかに切実に必要とされていたかを示していた。現在、MYSAは数百のサッカーチームのスポンサーになっている。それに加えて、奨学金を提供し、必要性の高い大規模なHIV／エイズ教育プログラムを運営し、写真プロジェクトを実施するほか、その他のコミュニティサービスの取り組みも無数に行っている。

優勝杯

最初の女子サッカーチームは1992年に誕生した。MYSA



の男子チームと監督がノルウェーに遠征に行き、女の子の試合を初めてその目で見たあとのことである。けれども、女の子に対して機会を広げるのは容易なことではなく、性別役割に対する根強い伝統的態度と格闘しなければならなかった。親から女の子の参加の承認を得ることは、男の子の場合よりも気が遠くなるほどはるかに難しかったのである。多くの親は、たとえば、娘が家庭で担っている無数の仕事をサッカーに邪魔してもらっては困ると強く感じていた。食事の用意も、妹や弟の世話も、非常に時間のかかる作業である。また、娘は暗くなる前に家に帰らなければならないのだと、断固として主張した。安全は、男の子よりも女の子にとってははるかに重大な問題であると考えてのことだった。

娘が参加することに対する母親の反応は全体としては前向きだったし、女子チームがノルウェーに遠征してユースカップでプレーし、14歳未満のチームが年齢別リーグで優勝したことも、一部の父親の頑固な反対を克服するのに役立った。「私がMYSAでプレーし始めたとき——」と、ある15歳の少女は語る。「お父さんは、女がサッカーなんかするもんじゃない、ぶん殴ってやるぞと言ったわ。だからどこかでプレーしたいときは、『あの子はどこそこにお使いにやったわ』って、お母さんがいつもウソついてくれたの。それから私がノルウェーに行ったら、お父さんも私がサッカーをするのをいいと思いはじめたのよ」¹⁾

力強く、たくましく

遊ぶ権利、チームスポーツへの参加の利益を享受する権利を少女たちに保障しようとする闘いは世界中で闘われており、その成功の度合いもさまざまである。女子サッカーチャンピオンの座を維持している米国では、高校でサッカーをプレーする女の子の人数が1990年代に112%増加し²⁾、2000年にはプロの女子サッカーリーグが創設された。米国

サッカー界のスーパースター、ブランディ・チャスティンは、世界中の数百万人の女の子たちのお手本である。「サッカーは、リーダーになる能力を女の子に与え、自尊心も向上させてくれるわ」と彼女は言う。「女の子は、自分がリーダーになれること、力強く、たくましくなれること、そしてそれが女性に完全にふさわしい資質であることを学ぶの。サッカーを通じて自分探しをするようになるのよ」

女の子は、スポーツに参加したほうが——感情面でも身体面でも——健康になる傾向があり、喫煙や薬物・アルコールの濫用に走る可能性も低くなる。生涯を通じてからだを活発に動かしてきた女性に乳ガンや骨粗しょう症が少ないこととも、関係があるかもしれない。それに加えて、スポーツに参加する思春期の女の子は性行動の開始時期が遅くなる傾向にある³⁾。スポーツに参加することは、自分のからだは自分のものであるという感覚、自分のからだには力が備わっているという感覚を思春期の女の子たちが発展させるきっかけとなり、自分のからだは男性のための単なる性的資源ではないと感じるようになるからという面もあるかもしれない。「サッカーをやるようになるまでは、びくびくしてたわ」とある女の子は言う。「いまはもう、びくびくしない。いろんな人といっしょにいることに慣れたし、何かいいことで何が悪いことか、わかってるから」。ケニアの若い女子選手は、次のように言う。「私はサッカーを通じて、自分なりの原則を持つこと、風に吹かれて流されたりしないことを学んだ」⁴⁾

1) Brady, Martha, and Arjmand Banu Khan, *Letting Girls Play: The Mathare Youth Sports Association's football program for girls*, Population Council, New York, 2002, p.14.

2) Women's Sports Foundation, *Women's Sports & Fitness Facts & Statistics*, p.11.

3) Sabo, Donald et al., *The Women's Sports Foundation Report*: